

William Saroyan: *My Name Is Aram* 覚書

——言葉を超えて——

吉富 広和

[1]

短編集 *My Name Is Aram* (1940) は、Fresno におけるアルメニア系移民の “the Garoghlanian family” に纏わる出来事が、一人称の少年 Aram の目を通して再現されたものである¹⁾。少年の観察にみられる純真さは、劇 *My Heart's in the Highlands* (1939) に典型的な郷愁²⁾と共に Saroyan 文学の顕著な特徴をなしている。この純粹無垢なる観察は、反面、知的洗練の欠如によるものとも考えられる。事実、Saroyan に対する批判、或いは誤解の多くは、彼が “unintellectual” であるという観測に基づいていたのだ。

貧困が為にさしたる学校教育も受けられず、町の図書館に学んだという Saroyan の知的水準がどの程度のものであれ、又そのような些末なことを問題にする心情が何に起因するものであれ、*My Name Is Aram* の中に流れる *anti-intellectual* な精神を看過することは出来まい。

＊

私達は、その *anti-intellectual* な面を、特に “My Cousin Dikran, the Orator” の中に見出すことが出来る³⁾。以下に、概観してみよう。

Aram の一つ年下の従兄弟 Dikran は、幼くして勉学に秀で、Garoghlanian 一族の希望の星である。Aram は、しかし、九歳当時の Dikran を “so much smaller in size [than myself] that I regarded him as somebody to ignore”⁴⁾ と回想する。さて、秀才 Dikran 少年は齡十一にして Longfellow School の首席且つ雄弁家の「名声」を博する。少年の母親も得意満面である。ところが、祖父 (the Old Man) は母親を諫めて曰く：

When you hear of a boy of eleven being the brightest boy in a school of five hundred boys—pay no attention to it. For the love of God, what's he bright about? Who wants a child to burden himself

with such a pathetic sense of importance? You have been a poor mother, I must tell you. Drive the poor boy out of the house into the fields. Let him go swimming with his cousins. The poor fellow doesn't even know how to laugh⁵⁾.

子供は外で遊べ、の弁である。

だが、祖父の憂慮をよそに、Dikran は、昼夜読書に勤しみ、ますますその博覧強記に磨きをかけている。この種の知識に対する the Old Man の不信の表明は、時に痛快である：

Well, the Old Man would say, you read books. That's fine. You are now eleven years old. Thanks God for that. Now tell me—what do you know? What have you learned?……

Here everything would go beautifully haywire. This little cousin of mine, eleven years old, would really begin to make a speech about all the wonderful things he had found out from the books. They *were* wonderful, too. He knew all the dates, all the reasons, all the names, all the places, and what the consequences were likely to be.

It was very beautiful in a minor, melancholy way.

Suddenly the Old man would stop the boy's speech, shouting, What are you……a parrot?⁶⁾

ここに反主知主義的な態度が明確であることに異論はなかろう。

しかし、老人は、一方にこのようなはっきりとした反感があるにもかかわらず、他方では一族の期待を担う「オウム」が誇らしくもある。Saroyan の人物描写の一つの特徴は、人間の割り切れない心情に寛容である点であろう。The Old Man にとっても、Dikran は “at any rate something special”⁷⁾ としか言えないものだったのだ。

よって、学芸会で発表する Dikran のスピーチを聴くために一族郎党打ち揃って出掛けるのも当然だし、その中に the Old Man の顔があることも又しかりなのだ。演題は *Was the World War Fought in Vain?* :

The speech was flawless: dramatic, well-uttered, intelligent, and terribly convincing—the conclusion being that the World War had *not* been fought in vain, that Democracy *had* saved the world. Everybody in the auditorium was stricken with awe, and applauded the speech wildly. It was really too much, though—I mean for the Old Man. In the midst of the thunderous applause, he burst out laughing⁸⁾.

「笑い」こそは Saroyan 文学のひとつの鍵であろう。主要な登場人物は、しばしば重要なところで笑っている。しかも、その笑いが極めて ambiguous なのである。あの “Laughing Sam” の Sam や “Sweetheart Sweetheart Sweetheart” の Tommy の “laughter” を思い出してみるとよかろう——単なる愉快的な笑いでないばかりか、照れ笑いとは非難の笑いとは、それぞれ、自暴自棄と怒りとに接しながら渾然と溶け合っているのを知る時、私達は、Saroyan の作品が扱う人間の「悲劇」の本当の意味での、すなわち T. S. Eliot の言い方を借りるならば、ギリシア以来の悲劇の伝統に影響を及ぼしうるという意味での「新しさ」に接する思いがするのである⁹⁾。Saroyan 悲劇の主人公達はいつでも卑俗な小人であるばかりではなく、彼らは時に笑わずにはいられないのである。

さて、the Old Man の「笑い」であるが、Saroyan の読者であるならば、それが孫の活躍嬉しさ故の単純な笑いでないことは、習慣的にも明らかなのである。しかし、文脈が尚この間の消息を説明してくれている。その夜、孫を呼びつけての褒め言葉は洗練とは無縁の皮肉であった：

I must tell you I am rather pleased. A statement as large and as beautiful as that deserves to come only from the lips of a boy of eleven—from one who believes what he is saying. From a grown man, I must tell you, the horror of that remark would be just a little too much for me to endure. Continue your investigation of the world from books, and I am sure, if you are diligent and your eyes hold out, that by the time you are sixty-seven you will know the awful foolishness of that remark—so innocently uttered by yourself tonight, in such a pure flow of soprano English¹⁰⁾.

ここに若き合衆国が奉じる民主主義に対する侮蔑、或いは 1950 年代の pacifism の先取りを読み込むのは行き過ぎであろうか。

とまれ、Saroyan の世界では無垢なる無垢は、つまり経験を通して磨かれることのない無垢は、単に「愚かしき」ものに過ぎないのである。Howard R. Floan は、Nathaniel Hawthorne, Henry James, Stephen Crane そして Mark Twain から Earnest Hemingway, Carson McCullers そして J. D. Salinger に至る “the bad boy tradition” の特徴として、“youth” と “age” とを明確に区別し “innocence” 故に前者に卓越性を見出す点を挙げた上で、Saroyan の独自性を次のように指摘している：

What sets Saroyan apart from the mainline of this tradition,

contrary to popular assumptions, is not the innocence of his children or their apparent immunity to evil. The difference relates to the conflicts in his stories, which do not derive from adult-child polarities but from contradictory impulses within the heart of man¹¹⁾.

結局, “My Cousin Dikran, the Orator”は the Old Man の嘆息 (sigh) で終わっている:

These crazy wonderful childeren of this crazy wonderful world¹²⁾!

二つの一見, 実はそうとも言えないが, 撞着語法: “crazy wonderful” に現れる “crazy” は, Saroyan においては「笑い」に比肩すべきもう一つの key word である。いみ嫌うべきものも, 憧憬の対象も同時に表されるのだ。しかも, 並べられている “wonderful” も本来その両義に跨がっているのであれば, “crazy wonderful” という表現はいつそう面妖である。子供の無垢を, そしてその無垢なる子供の言葉を賞揚する世間を嘆いているようでもある。また経験を積んだ老人は無垢なる無垢に寛大であるようでもある。

[2]

“Crazy” について更に考えてみよう。Saroyan の数多くの “crazy” な登場人物の中でも “The Three Swimmers and the Grocer from Yale” の Mr. Abbott, the Grocer こそは, その好例である。

4月の或る日, Aram は従兄弟の Mourad とその友人でリーダー格の Joe との三人で Thompson Ditch で初泳ぎを試みる。少年たちの世界では, こういう場合, 先を競わなければ沽券に関わる失態である。しかし, 雪解け水の冷たさに加えて折からの雨——裸になって我がちに水に入った (dive) 三人ではあったが, 寒さに震えながら家路に付く羽目になった。途中, 暖を取るべくと或る雑貨店に入る。店の主とおぼしき “funny” で “young” に見える老人が, 持ち合わせのない少年たちに食べ物や飲み物を与えて話しかけてくる。

Abbott と呼ばれるこの老人の受け応えは, 後に narrator によって “poetry” と回想されるのだが, いつでも一種無意味な戯れ語である: ¹³⁾

Well, I'll be harrowed...

Well, I'll be cultivated...

Well, I'll be pruned...

Well, I'll be gathered into a pile and burned...

Well, I'll be irrigated...

Well, I'll be picked off a tree and thrown into a box...

Well, I'll be cut off a vine and eaten grape by grape by a girl in her teens...¹⁴⁾

確かに、少年たちとの会話の内容とは無関係ではあるが、詩であるにはちがいない。一人称は何かの農作物であろう。又は、農作物を育む大地やその生命力であろうか。春の種蒔きから秋の収穫までが未来形で語られている。雪解け水運ぶ ditch とそこで遊ぶ少年たちがこの詩の着想のようにも思われる。

少年たちと Abbott との会話が弾んでいるところに、馴染みの判事が一杯引っ掛ける為に立ち寄る。この判事が、泳いだという少年たちに向かって、熱 (fevers) でもあるのかと詰問すると、the Grocer は大いに「笑っ」て曰く：

……these boys dived naked into the black water of winter and came up glowing with warmth of summer¹⁵⁾.

自然の循環、すなわち四季の中でも「春」が「詩人」の主題であったのか。家路につくべき少年達の謝意を受けての「詩人」の “Not at all……I thank you.” は、取材に対する返礼とも取れるのである。

この場でもう一つ注目すべきは、“Babel” 以来の言語分裂の問題である。多民族国家のアメリカである、移民やその子弟たちが様々な言語を話すことは当然な事ではある。「教育」を受けていないという Joe もポルトガル語を話すし、Mourad と Aram がアルメニア語を話すのも不思議なことではない。しかし、この Yale 出身だという雑貨商 Abbott は自分の知らない言語に対して一々驚嘆するのである。途中で現れる判事もフランス語を少しは話せると言い、別れ際に、イタリア語で馬を「盗んだ」と訴えられ、メキシコ語で「借りた」だけだと言っている男にこれから判決を下すのだと語る。

これは、詩人 Abbott の言葉に対する興味の現れのようにもあるし、店での英語を用いた多愛のない言わば無意味な会話をも含めて、communication の手段としての言葉に対する不信の現れのようにもある。作者は、この点に関しては明確な表現を避けているようだ。いずれにせよ、雑貨店の会話の場面の後で、店の主人には奇妙な「沈黙」が訪れる：

The grocer seemed to be in a strange silence for a man only a moment before had been so noisy with talk¹⁶⁾.

家路についた少年たちも概ね言葉数が少ない：

We walked along the highway in silence¹⁷⁾.

その少年たちの関心事は、「詩語」を語る Yale 出身という雑貨商が果たして“crazy”であったか否かの問題である：

Joe was the first to speak.

That Mr Abbott, he said, he's some man……he sure is some man.

……Joe said. Was he crazy?

I don't know, my cousin Mourad said.

It took us another hour to get home. We had all thought about……whether or not the grocer was crazy. My self, I believed he wasn't, but at the same time it seemed to me he had acted kind of crazy¹⁸⁾. 思案するうちに Joe の家が近くなる。他の二人と別れた Joe ではあったが、50 ヤード離れたところで振り向いて何か言っている。しかし、二人には聞こえない：

What? my cousin Mourad shouted.

He was, Joe said.

Was what? I shouted.

Crazy, Joe shouted back.

Suppose he was crazy? my cousin Mourad said. What of it?

I don't think he was crazy, he [Joe] shouted.

He went on down the street.

He was pretty crazy, my cousin Mourad said.

Well, I said, maybe he's not always¹⁹⁾.

問題の解決は、次回の水泳の折まで延期されることになる。

ともかく、少年たちにとって、件の雑貨商は、普通の大人とは一風変わった“some man”なのである。この“some man”は、しかし、決して否定的な呼称ではあるまい。意味不明な言葉を用いるとはいえ、自分たちの話に熱心に耳を傾け、時には驚嘆・感心の様子すら示し、そして何より、採算を無視して飲食物を振る舞う老商人に、少年たちは、現代の尺度によっては単純に否定しさられるかもしれない前近代的な一種畏敬のような気持ちを抱いているのであろう。この“some man”を、少年たちが無邪気に“crazy”と呼ぶことは、極めて当然のことである。しかし、この“crazy”を疑問視したり、否定したり、又肯定したり、仮定したり、部分否定にしたりするとき、少年

の純情が否応なく直面する問題が作品の主題として浮き彫りにされるのだ。

一月後、少年たちは Thompson Ditch での水泳の帰りに再び雑貨店に立ち寄った、自分たちの問題を解決するために。ところが、例の老雑貨商は居らず、代わりにずっと若い男が店をやっていた。やむを得ず、その男に疑問を突きつけてみる：

Was he [Mr. Abbott Darcous] Crazy? Joe said.

Well, the young man said, that's hard to say. I thought he was crazy at first. Then I decided he wasn't. The way he ran this store made you think he was crazy. He gave more than he sold. To hear him talk you'd think he was crazy. Otherwise he was all right.

Thanks, Joe said.

The store was all in order now, and a very dull place. We walked out, and began walking home.

He's crazy, Joe said.

Who? I said.

That guy in the store now, Joe said²⁰⁾.

ここに観られるのは、Saroyan 一流の paradox である。若い男の応答は、大人がいつもするような、どっちつかずの曖昧なものである。現実には確かに白黒がつかないものであるからかもしれない。前任者が“crazy”であったか“crazy”でなかったか、若き有能な商人は即断を避けた。だが、少年はそんな大人をお前こそ“crazy”だと断じて憚らない。ここに到っては“crazy”の語義に曖昧さはない。つまり、“crazy”の学習は完了したのである。一月前に込められた畏怖とも憧憬ともつかぬ思いは払拭されている。意味の反転とでもいうべきものが起こったのである。

Saroyan の登場人物が“crazy”という言葉で何かを説明しようとするとき、その何かはしばしば別の何かに向かう素朴な衝動を持っている。例えば、砂漠を果樹園に変えるという途方もない夢を抱く老人が“crazy”であるというように²¹⁾。そして、この素朴な衝動は、必ず現実という試練に出会わされる。砂漠に果実が育つ筈もないという現実である。ところが、この現実と出会ってからですら、Saroyan の登場人物は目を見張るような変容を遂げるといったことはない。ただ“crazy”の別の意味を認識するのである。相変わらず以前の“crazy”のままであって、それに対する世間の“crazy”であるという批判を甘んじて受けるのである。

[3]

すでに観たような知識に対する懷疑は、最終的にはその知識を運ぶ器である言葉の拒絶にまで至る。“The Poor and Burning Arab”の題名の主は正にその典型であろう。

Aramの伯父であるKhosroveも、素朴なFresnoの住人の一人である。町のCoffee Houseは、祖国を何千マイルも離れた移民達が一時の憩いを求める場所である。Khosroveもその常連であった。一時間もじっと座った後で、移民の境遇に対する内なる「怒り」を故なく他の客に向けて吐露する：

Poor little ones, he would say. Poor little orphans. Or literally, Poor and burning orphans.

Poor and burning—it's impossible to translate this one. Nothing, however, is more sorrowful than the *poor and burning* in life and in the world²²⁾.

この店でKhosroveは、短編の題名になっているアラブ人移民と出会う。どうやって二人が親しくなったのか、その詳細は誰も知らない。このアラブ人は、

……a small man from the old country who was as still as a rock inwardly, whose sadness was expressed by brushing a speck of dust from his knee and never speaking²³⁾.

である。更に、彼の無口は次のように説明されている：

He could speak no English, only a little Turkish, a few words of Kurdish, and only a few of Armenian, but he hardly ever spoke anyway. When he did, he spoke in a voice that seemed to come not so much from himself as from the old country. He spoke, also, as if he regretted the necessity to do so, as if it were pathetic for one to try to express what could never be expressed, as if anything he might say would only add to the sorrow already existing in himself²⁴⁾.

この“poor and burning little orphan”とKhosroveとの交友は、誰も「語ら」ないけれども皆「知って」いる老アラブ人の死までの約一年間続けられる。時々、伯父は友人を連れてAramの家に来て来た。一時間、時には二時間も“parlor”に座って、コーヒーを飲み、煙草を吸い、しかし殆ど何も語らず、そして帰る。後には二人と煙草の匂いが残っているばかりである。言葉を用いない二人を不思議に思うAramは、或る時、二人が帰った後で母親

に問い正してみる：

Did they talk at all?

I don't know, my mother said.

They didn't, I said.

Some people talk when they have something to say, my mother said, and some people don't.

How can you talk if you don't say anything? I said.

You talk without words. We are always talking without words²⁵⁾.

ここでは、言葉を用いない communication というものが前景に出されている。もう一歩進めば、言葉そのものの有用性が疑問視されよう。Aram は問い続ける：

Well, what good are words, then?

Not very good, most of the time. Most of the time they're only good to keep back what you really want to say, or something you don't want known²⁶⁾.

この母親の説明は、本当のことを言葉は伝えられないということの逆説的な謂であろう。言葉は虚しと言うのもまた言葉によってではないか、といった「クレタ島の嘘つき」的議論には立ち入らないことにしよう——とにかく言葉による communication の可能性が後退していることを確認しておきたい。二人は言葉を用いずして communication を行っていたのである。母親の説明は続く：

They never open their mouths, but they're talking all the time. They understand one another and don't need to open their mouths. They have nothing to keep back.

Do they really know what they're talking about? I said.

Of course, my mother said.

Well, what is it? I said.

I can't tell you, my mother said, because it isn't in words; but they know²⁷⁾.

真の理解は言葉を越えている——このことは、近代が宗教的な意味でも、世俗的な意味でも、その拠り所が言葉であったのであれば、歴史の流れに逆行するかのようにも取れる。また、個人の成長が知識のすなわち語彙の拡大と平行しているのであれば、その成長を否定しているかのようにも取れる。いずれにせよ、ここにも Saroyan の anti-intellectualism の一端がうかがえ

よう。

実は、Aram の伯父が言葉を越えて理解し合っていたアラブ人の風采には子供を思わせるものがあったのだ。作者は、言葉の拒絶を精神的な、そしてその顕現したものとしての身体的な成長の拒絶と平行に提示しているのである。彼の人物描写は以下のようなものであった：

He was no bigger than a boy of eight……He was probably in his early sixties. In spite of his mustache, however, he impressed one as being closer to a child in heart than to a man. His eyes were the eyes of a child, but seemed to be full of years of remembrance……years and years of being separated from things deeply loved, as perhaps his native land, his father, his mother, his brother, his horse, or something else²⁸⁾.

ここに表現されているものは、時間的にも空間的にも隔たって在る者の romanticism である。特に時間に限定して言えば、子供の如き老人、即ち経験を経ての無垢をこのアラブ人は体現しているのである。そしてこの点にこそ私達は *My Name Is Aram* の *leitmotif* を見出し得ると考えるのだ。

“The Poor and Burning Arab” 全編を通して響き逢う、“Aram” と “Arab” との不完全韻にも注目されたい。少年 Aram と老 Arab とが重なってゆく。勿論かつて少年であった作者の観察を通してである。前に引用した Howard R. Floan も *My Name Is Aram* という短編集の表題の最初の一人称所有代名詞に着目しつつ述べている：

The narrator is an adult recalling his youth, and Aram is therefore both man and boy. To the extent that the pronoun of the book's title has a precise meaning, it refers to a residue of romantic responsiveness from the narrator's youth²⁹⁾.

＊

確かに、*My Name Is Aram* は「子供」と「大人（しばしば老人）」との対話から成り立っている。それは作者自身的一种完成された monologue とでも言い換え得べきものである。子供のままでは居られないし、かといって全く異質な大人になりきる訳にもいかない。かくして、経験を経て尚無垢である者の独白は、かの Wordsworth の至言：“The Child is father of the Man.” に通ずるものとなるのだ。

現実には無意味な言葉・馬鹿げた知識が蔓延しているのだけれども、そう

いった現実を知って尚それを超えた実在を理解し得る素朴な人々が Saroyan の原風景と言うべきものであったのだろう。

短編集の白眉は巻頭の “The Summer of the Beautiful White Horse” である。愛馬を盗まれた農夫は、知的な意味で決定的な証拠を目の当たりにしてさえ、馬泥棒（本人たちは借りた積もりでいる）を信用してしまう。農夫は惑わず：

A suspicious man would believe his eyes instead of his heart³⁰⁾.
私達は、この農夫を “crazy” と笑殺し得るのであるだろうか。

注

- 1) 小説 *The Human Comedy* (1943) と並んで自叙伝的趣が色濃いと言われる。両代表作において、描出語法を駆使した独特の文体が完成の域に達している。
- 2) 序文を初め *My Heart's in the Highlands* には Robert Burns の同名の詩が用いられている。
- 3) 他に, “A Nice Old-Fashioned Romance,” etc.
- 4) William Saroyan, *My Name Is Aram* (An HBJ Classic ; Harcourt Brace Jovanovich, 1940), p. 79. 作品からの引用は全てこの版に拠った。尚, 引用文に下線がある場合は、私が施したものである。
- 5) *Ibid.*, p. 80.
- 6) *Ibid.*, pp. 80-1.
- 7) *Ibid.*, p. 81.
- 8) *Ibid.*, p. 82.
- 9) *My Heart's in the Highlands* の序文を参照。Saroyan には自らの作品を “a classic” と断じるだけの自負があった。
- 10) *My Name Is Aram*, p. 82.
- 11) Howard R. Floan, *William Saroyan* (Twayne, 1966), p. 82.
- 12) *My Name Is Aram*, p. 83.
- 13) *My Heart's in the Highlands* の主人公 Johnny の父親を想起されたい。彼も又巷に隠れる「詩人」の一人であった。
- 14) *My Name Is Aram*, pp. 120-1.
- 15) *Ibid.*, p. 123.
- 16) *Ibid.*, p. 124.
- 17) *Ibid.*, p. 124.
- 18) *Ibid.*, p. 124.
- 19) *Ibid.*, pp. 124-5.
- 20) *Ibid.*, pp. 125-6.
- 21) “The Pomegranate Trees” を参照。
- 22) *My Name Is Aram*, p. 152.
- 23) *Ibid.*, p. 149.
- 24) *Ibid.*, p. 150.

- 25) *Ibid.*, p. 155.
- 26) *Ibid.*, p. 155.
- 27) *Ibid.*, pp. 155–6.
- 28) *Ibid.*, p. 149.
- 29) Howard R. Floan, *Op. cit.*, p. 83.
- 30) *My Name Is Aram*, p. 11.